

「グリム童話」について

—その魅力と魔力—

中野和朗

日本におけるドイツ文学の受容は一見たいへんはなばなしのものに見受けられる。ドイツ古典主義やロマン派をはじめとして、いわゆる古典的作家や詩人が、装いを新たにして繰り返し出版される一方で、次々と新人たちが紹介されている。しかし、このはなばなしもすこしたち入って観察してみると、意外に底の浅いものだということがすぐ判る。因みに街の人びと、例えば床屋の小父さんや寿司屋の若い衆などにゲーテ、シラー、ヘッセ、トーマスマンなどという名前を挙げて質問してみると、期待した返事のかわりに困惑と侮蔑ないしは、ひょっとすると、憐びんが混じったうとましげな表情に出食わずことになるだろう。世間のことに精通しているこれら巷のマイスターたちにかかるとは、ドイツ文学のマイスターたちも形無しなのである。だからゴットフリート・ケラーだのアンナ・ゼーガースだのハインリヒ・ベルといった名前が、映画俳優にされてしまうのはまだしも、ひょっとしてお菓子かワインの名前にされてしまったとしてもおどろくには当たらないのだ。つまり我が国における一見したところははなばなしドイツ文学の受容も、実はごくごく限定されたインテリ層での現象に過ぎないということである。

ところが、このような中であってまことに驚くべき例外が在る。老若男女を問わずほとんど全ての日本人に識られているドイツ文学がある。それは「グリム童話」である。

「イソップ物語」だの「アンデルセン童話」だの「ペロウ童話」だのと類似のものがいろいろ存在するので、どの話しが「グリム」であるのかとまどう向きもあるかもしれないが、「赤づきん」、「おおかみと七匹の子やぎ」、「ヘンゼルとグレーテル」、「白雪姫」などと並べると誰にもすぐ思い出されるにちがいない。

「夜、ベッドに横になると、私はひるまこの地で新しく見たり、聞いたりしていることがまるで影のようにしか感じられない自分に驚いていた。私はたしかに子供のように見聞をたのしんではいた。しかし、すでにそれらは昔どこかで経験済みのような気もしないではなかった。子供のころのグリム童話の遠い記憶が動き出しているのかもしれない。」⁽¹⁾とは、あるゲルマニストのはじめてのドイツ旅行での述懐であるが、とくにゲルマニストと限らなくてもわれわれ日本人の誰にも、例えば、ベッドのかたわらで母親から読んできかせられた「白雪姫」だとか、幼稚園の人形劇で観た「赤づきん」だとか、小学校の学芸会で演じられた「ヘンゼルとグレーテル」等々、さまざまな形での何らかの「グリム体験」があるのではないだろうか。

つまり、「グリム童話」はわれわれ日本人にとって、もはや「外国文学」という異和感が薄れたきわめて唯一例外的なドイツ文学なのである。

ところで、われわれのこのような「グリム体験」とは何なのだろうか。その持つ意味は

何なのだろうかと考えてみる。しかし、われわれの見聞した「グリム童話」なるものは、実は、本来の「グリム童話」にきわめて大胆というよりも乱暴な教育的配慮による改変の大なたがあるわれた「グリム童話にしてグリム童話に非ず」といっても過言ではないような代物であり⁽⁴⁾、それをグリム体験などというのはいささかおごがましいことかもしれない。教育的配慮という大なたが、ばっさり切り落してしまう箇所は、きまって「グリム童話」の真実を理解するためにはなくてはならないような場面なのである。たとえば、「シンデレラ」の、二人の姉が靴に足を合わせるために足の指やかかとを庖丁で切りおとす箇所とか、また、「白雪姫」では、白雪姫と王子の婚礼の席に出かけていったおきさきが、真赤にやけた鉄のくつをはかされて殺されてしまう場面、といった具合なのである。

それはともかく、わが国の代表的な「グリム観」のひとつに次のようなものがある。

「グリムの童話全体につうずる最大の特徴は、いかにも素朴でしぜんであるということでしょう。そこにはみょうに教訓めいたかたくるしさや、むりに興味をそそる作意や、あてこすりの皮肉や、上品ぶった虚飾などは、すこしもみられません。粗野や暴力、こうかつや謀略、邪悪や残忍さえもが、おおいかくされてはいません。それどころか、ときにはそれらは当然のようにおこなわれます。じっさいそれは、道徳いぜんの素朴としぜんであるといってもよいくらいです。いや、いってもよいくらいではなく、じじつ、そうなのです。(中略)グリムの童話がこんにち世界じゅうの子どもたちから愛読されているのは、このためでしょう。よくグリムの童話は、〈子どもの聖書〉といわれます。聖書とおなじくらいたくさん子どもたちに読まれるという意味ならば、この比喩は問題ありません。しかし、聖書とおなじように道徳的教訓の書として役だつという意味ならば、この比喩は適切ではありません。グリムの童話の世界は、そうした教訓いぜんの、自由不羈の自然的世界です。』⁽⁵⁾

この見解には、あきらかに「グリム童話」から無理矢理「道徳」をひき離そうという意図が含まれている。これはとんでもない間違いである。それは、グリム自身が「童話は愛すべき文学として、おさないころこれを読んだ人びとに、とうとい教えとはれやかな思い出とを一生のあいだあたえる。』⁽⁶⁾と述べて、「童話」と「とうとい教え」との関係を明確に指摘していることを挙げれば十分であろう。

そもそも、文学には「道徳」がつきものなのだ。とくに「童話」には、どのように粉飾がほどこされていようと「道徳」がこびりついているものであって、それこそ『「道徳」のない『童話』なんてホップ抜きのビールみたいなものだ』といえる。

文学というものは、なによりもまず「たのしみごと」である。人をたのしませ、よろこばせ、元気づけるもの、さらにいえば感動させるものである。しかし、この「たのしみごと」は、ただ単に「ああ面白かった」「たのしかった」ということで終わってしまうものではないのである。この点が、文学がひと筋縄ではいかぬくわせ者たるゆえんなのである。つまり、人がある作品を読めば、必ず何らかの情感が残映のようにその人の心に残ってしまう。それは目に見えないものとして心のひだの奥深いところにひそみかくれる。文学のもつ「こわさ」は、このような心の中への侵透力である。

私たちはいわば「まっさらな状態」、最初の線がひかれる前の「真白なキャンパス」の状態でこの世に出現するのだが、成長するにしたがって、日常的な学習を通して、しらずしらずの内に「人格」が形成されていく。「真白なキャンパス」状の幼児の心ほどこわいものはない。彼の周囲のありと凡ゆるものがこの真白なキャンパスの上に殺倒してこびりついゆく。

ところで、母親が幼児に語って、ないしは読んできかせる「童話」も、あの心への怖ろしい侵透力をもつ文学であることにちがいはない。この幼児の心にどんどん侵透して「人格」を形成させるもの、これがいったい「道徳」でなくてなんなのだろうか。

それを「(道徳的) 教訓いぜんの、自由不羈の自然的世界」だなどと「グリム童話」を得体の知れないものにしてしまうのは、「思い入れ」が過ぎるというものだろう。「グリム童話」のもつ「道徳的教訓性」は、もはや全く疑う余地はないが、にもかかわらず我が国の「グリム童話」評価はおしなべて、「たくましい空想と夢を与え、ゆたかな童心をはぐくむ、くんでつきぬ泉」といったものになっている。これは、文学のもつ「道徳」との否定しがたい血縁関係をこころよく思わぬ人びとの「文学観」が基本となつてつくり出されたものにちがいないが、なんと異様というほかない。

「グリム兄弟、特に弟のヴィルヘルムが文体的に磨きをかけて、口伝の昔話から洗練された読む昔話を作り出した。そしてこの昔話集が世界を征服したのである。とはいえ、磨かれたもの、ふっくらしたものが多いものとは限らない。グリム兄弟は私たちみんなと同じように、時代の子であった。その時代というのは、ロマン派の終り、ビーダーマイヤーのはじめである。秩序と清潔、家庭的なくつろぎ、守られた状態と暖か味、自然と事物の人間化など、市民的なビーダーマイヤーの好みに合した傾向が、グリム兄弟の昔話集にはっきり跡を残している。」⁽⁵⁾ という指摘や、「『グリム童話』はご承知のように、19世紀初めにグリム兄弟がドイツ各地の民話を集めたものですが、グリム兄弟は決してお話好きの人だったわけではなく、言語学者であり、法律家でした。19世紀の初めは、ドイツがまだ国家として完成されていないときで、当時のドイツの知識人たちは、いかにしてドイツの国家を作っていくか、いかにしてドイツの民法を整理するかということを考えていた時期であります。そこで、知識人のいろいろな策略がなされたのです。その中で、このグリム兄弟は、理想的なドイツ民法を作るためには、まずドイツ各地の民話から法意識を探らなくては行けないと考え、民話を集め始めました。それが『グリム童話』です。」⁽⁶⁾ といった指摘は、「『道徳』いぜんの自由不羈の自然の世界」などという良識的俗論を一挙にこっぴみじんに粉砕してしまう。

さらに「グリム童話」を観る場合、次のような歴史的事情はどうしてもわきまえておかれねばなるまい。

グリム兄弟(兄ヤコブ・グリム1785~1863、弟ヴィルヘルム・グリム1786~1859)が、古くからドイツ民衆の中に語り伝えられてきた「民族メールヘン」の収集をはじめたのは、ドイツロマン派の一つの金字塔であるクレメンス・ブレンターノとエリーザベト・フォン・アルニムが編集刊行した「少年の魔法の角笛」(1805~1808)との関わりや、アルニムのすすめなどによるもので、1806年からということになっている。そして1812年の12月、クリスマスの直前に「グリム童話」(「子どもと家庭のメールヘン」“Kinder-und Hausmärchen”)の第1巻が出版された。まさにドイツロマン派の最盛時であった。そして政治的、または“事変史”的には、ドイツ諸国は、1789年のフランス革命の余震に揺り動かされ、さらにはナポレオンの軍勢に全土を蹂躪されていた。1806年にはプロイセンが敗れ、それまでドイツ諸国の盟主として君臨してきた神聖ローマ帝国は、名実ともに消滅し、ドイツ諸国は、分裂抗争のまさに動乱の時代であった。そして「グリム童話」初版の第1巻が出された翌1813年、ついに連戦連勝のナポレオンがライプチヒで敗北し、ようやく四分五裂のドイツ諸国が統一国家形成へと向かうことになる。つまり近代的ドイツ国家誕生への陣痛の時代であった。

グリム兄弟はただ単にドイツロマン派の世代に属していたというだけではなく、まさにその運動理念の実践者として、「グリム童話」を世に問うたというこの点がきわめて重要なことである。近代統一国家建設の前提として、統一言語と統一的民族精神が要請されたが、グリム兄弟の「グリム辞書」の編纂をはじめとするドイツ語研究の成果と、「ゲルマン学」(ゲルマニステイク) 確立の業績もまぎれもなくこのような要請に応えるものであった。したがって「昔話の中に脈打っているドイツ民族の心の鼓動をよみがえらせることによって、ナポレオン戦争で悲境のどん底にあえいでいたドイツ国民に、民族としての自覚と誇りを取りもどさせたいという気持が兄弟にあったことも否めない。初版の序文の日付は『1812年12月18日』となっているが、ヤーコブは後にその下に『ライプチヒの戦いのちょうど一年前』と書きこんでいる。即ちライプチヒでドイツ軍が連合軍と共にナポレオンに対し決定的な勝利を収めた年の一年前、まだドイツがナポレオンの重臣下にあった時を、ヤーコブは童話集と結びつけて考えずにはいられなかったのである。ヤーコブはまた30数年の後、ベルリンの学士院で『われわれの学問、言語と文学に対する根強い感情こそ、ドイツ国の悲境と無力のどん底の時代において、国民を力づけ、内から奮起させ、滅亡から守ったものである』(1849年11月)と講演している。それはまたグリム兄弟だけの気持ちではなかった。民謡や伝説や民話の価値を認め、収集しようという気運は、ヘルダーの提唱によってすでに起っていた。文学的遺産の発掘と再認識への学問的志向と、それを精神作興に役立たせようとする愛国的心情を、グリム兄弟が解放戦争の当時つよく持っていたのは、当然であろう。』⁷⁾ という指摘はまったく正鵠を得た見解といわねばならない。

グリム兄弟、とくにヤーコブは、歴史家フリードリヒ・カール・フォン・ザヴィニーから大きな感化をうけ、概念から事実を組み立てるのではなく、個々の事実を実証的に検討し、そこから帰納的に概念をみちびきだすという学問の方法論を学んだ。したがってここでもその方法論にならって、「グリム童話」の個々の具体的話しを検討し、「純粹に民族的、ゲルマン的精神」とはいかなるものかを帰納的に導きだすことをこころみることにしよう。

話の筋道を逐一説明するわずらわしさを避けようとすれば、誰にも知られている話をとりあげるのが妥当であろう。手はじめにあの「ヘンゼルとグレーテル」からとりかかろう。

われわれの幼い頃の「ヘンゼルとグレーテル」のはのかな記憶をたどると、まず想い出されるのは、恐ろしい森の中を迷い歩いた兄妹が、なんとも嬉しいことにお菓子でできた家を見つけ、思いきりお菓子の屋根瓦や窓にむしゃぶりつく情景であろう。そして勇気と智恵の権化のような兄妹が力を合わせていやらしい魔女の老婆を退治し、宝をどっさり持って無事家に帰りつくことができたことでホッとしたことではないだろうか。お話としてはスリルとサスペンスに溢れ、しかも羨望と賛嘆と安堵がまじり合わされた感情がそこにあったのではないだろうか。思い当たるグリムの幼児体験がこの程度のものでしか残っていないのであれば、なにもこのお話の中から「ゲルマン精神」を探りだそうなどということはいささか大げさすぎて、気がひけないわけでもない。しかし、教授会の最中「グリム童話」に没頭するいささか不謹慎なフランクフルト大学の現職教授イリング・フェッチャーは、なんとこの「ヘンゼルとグレーテル」の中に二つの犯罪事件を発見し、ものの見事に「ヘンゼルとグレーテルの仮面をは」いでいるのだ。教授の指摘によると第一の犯罪は、両親(れっきとした実の両親である)による実子殺人計画であり、二番目は、兄妹の老婆殺人事件である。しかも単なる殺人事件ではなく強盗殺人事件だというのである。⁸⁾

こう指摘されて、あらためてこの話を入念に読み直してみると、この教授の指摘に対して一点の疑いもさしはさむ余地のないことが判明する。このような眼で眺めると、二つの犯罪事件のほかに、この話が教えようとしている実にさまざまなことがはつきりしてくる。

例えば、生活に窮すれば親は子どもを捨てても構わない。そして子供はどうやらそれを甘受しなければならないという教えである。この点では「ライオンの親は可愛い子どもを千俵の谷底へ突き落とす」という古来からの子育ての秘訣がピンと思ひ当たる。すると、どうやらこれがゲルマン魂をつちかう教育方法なのだとなつて納得させられる。ヘンゼルは、両親の「殺人計画」——じつは子供を錬える有難い親心ということになるが——を盗みぎきして知っているのだが、そのことについては一切反抗もしなければ、泣きごともいわない。しかも道しるべとする小石をこっそり拾い集めさえする、まことに利発で、健気な少年である。つまり、ゲルマン精神に照らしてお手本とすべき典型的少年像ということなのにならぬ。してみるとワンダーフォーゲルとして世界各地をまたにかけてひとりて遍歴して歩くあのドイツ青少年たちは、すべてまぎれもなきヘンゼルたちであったと、これまた納得されるのである。そしてグレーテルである。心細いとすこしは泣きもするが、すぐに気をとり直し、兄のことをよく聞き、よき補助者となり、いざ有事となればなんとりりしく、機転のきく行動をとり、魔女——害敵——をやっつけるあつぱれ偉丈婦となるのである。これまた“ゲルマンなでしこ”の鏡なのにならぬ。さらにこの話の見落してはならない教訓がある。それは、「魔女」はどのような手段であろうと——たとえあざむいても——殺しても罰されないという教えである。「森の中にお菓子でできた家に住む財宝を貯めこんだ魔女」は、フェッチャー教授にならって表現しなすと、さしずめ「いわれなき差別を受けながらも豪華な邸宅を構え、財産を貯めこんでいる非ゲルマン人」ということにならうか。しかもこの非ゲルマン人の財産は没収または奪取してもよいということもつけ加えられているのだ。この最後の教えを知れば、私たちに何故か、第二次大戦中のナチのユダヤ人にたいするあの蛮行が想起されてしかたがない。⁽⁹⁾

フェッチャー教授は、実に大胆な「グリム童話のひっかきまわし」をなしているのだが、「ヘンゼルとグレーテル」に関しては、そこに二つの犯罪、しかもたかだか刑事事件の指摘をするにとどめ、賢明にもドイツ人自身を、つまり自分で自分自身を断罪しなければならないような「ひっかきまわし」は注意深く避けている。

ゲルマン魂の子育て法である「子捨て」のテーマは、「グリム童話」の中に数え切れぬと表現しても過言でないほどくり返えし現われている。フェッチャーは、この親子関係を“Freund-Feind Verhältnis zu Eltern”と名づけているが、同様な発想でマックス・リュティは次のように書いている。

「実の母がわが子を追い出すテキストは、この型に属する話（中野註：「白雪姫」）の本質を実によく示している。美しい子どもをほしがった、その同じ女が、のちにはその子をねたんで、厄介払いにしようとする。母親は誰でも、まま母になる危険を孕んでいるのである。実の母親はみんなよい意味で『まま母』にならなくてはならない。母親は子どもの願いをねつけなくてはならない。ナイン（否、ノ）と言わなくてはならない。拒絶することができなくてはならない。⁽¹⁰⁾

ところで、もっとも有名な「まま母」として知られているのは、「白雪姫」の「おきさき」であろう。さて、「ひっかきまわし」の元祖、フェッチャー先生は、「白雪姫」をどのよ

うに扱っているのであろうか。

彼は、「ひっかきまわし」元祖にふさわしくグリムの「白雪姫」の原テキスト「元祖・白雪姫」なるものを考案している。⁴⁴

それによると「元祖・白雪姫」は、富と栄光につつまれて大きくなったが胸の奥底ではその富と栄光が民衆の貧困と搾取にもとづいたものであることに気づいていたのでしあわせではありませんでした。そしてある日森の中で、民衆を圧政と搾取から解放するために戦っているバルチザンと知りあい、解放戦線に加担し、ついにバルチザンが王政をたおし、革命人民政府をうちたて悪いおきさきは処刑され、王は下級職について民衆のために奉仕することになりました。白雪姫は女性解放の味方となり国じゅうの人びとから愛され、尊敬されました、というものである。

この「元祖・白雪姫」の原テキストが、原形の不都合な部分に改作が加えられて英雄的な人民蜂起の記録が、月並なお涙ちょうだい物であるいまのものになってしまったというのである。例の魔法の「鏡」は、王の秘密警察の童話的アレゴリーなんだと、あっさり片付けられている。そしてオリジナル版「白雪姫」は民衆の阿片ではなく、阿片とは逆の効果をもっていた、と述べている。

まことに奇想天外な「ひっかきまわし」で、フェッチャー教授の才能に感嘆せずにはいられないが、しかしこれではグリム時代に期待された「ドイツ民族」の「民族精神の作興」にどれだけ寄与し得るかはなはだうたがわしい。

「ゲルマン魂」の鼓吹という観点で「白雪姫」をひっかきまわしてみよう。国中で一番美しい「白雪姫」を、あれこれ考えめぐねることをせず、素直に時代が要請している「ドイツ民族の精神」ということにはしてみたらどうだろう。するとあの諸悪の根元である「おきさき」は、いまは権力の座に坐ってのさばっている、「にせ」の「ゲルマン精神」ということになる。これが「壁の鏡」という権力機関の総力をあげて、本物の「ゲルマン精神」征伐に躍起となるのであるが、国じゅうでいちばん美しい本物の「民族精神」は、民衆（かりうどやこびとたち）や自然の支援をうけて、破滅の危機を克服し、若くて力のある新しい権力を手中にし、つまり素敵な王子さまと結婚し、ついに「にせ」の「民族精神」を打倒する、ということになるが、この「ひっかきまわし」はどう評価されるだろう。

さて、「グリム童話」の中でももっとも美しく、もっとも愛され親しまれている「白雪姫」は、わが国でも多種類のものが刊行されている。⁴⁵ しかしそのほとんどに何らかの改変が加えられたり、削除されたりしており、とくに、ママ母が狩人に命じて、白雪姫を殺して、その証拠に肺臓と肝臓をもち帰らせ、それをママ母が塩漬にして食べてしまう箇所、そして、終末部分で、ママ母が真っ赤に焼かれた鉄のスリッパをはかされて踊らされて死んでしまう、というよりも殺されてしまう箇所の二箇所については、ほとんど削除されているようである。⁴⁶

「白雪姫」についてリュティは次のように述べている。「白雪姫の話は、年を取ることがまがならない女の話、そのために苦しめられる若い人間の話というだけではない。ねたみとやきもちは悪の一番太い根であることを明らかにしているだけではない。それを越えて更に、人間存在の根本的な特徴をいろいろと見せているのである。つまり、事物が反対物に転化する驚きと素晴らしさ、死んだと思われている人間が復活するふしぎ、われとわが身に苦しむことなどである。（中略）しかしながらそこにはまた、救済ばかりでなく、見捨てられた人間が段々と成熟してゆく有様も見られる。（中略）人の世の息がつかまるほど緊張した

状態の中で、白雪姫の素直さは魂を象徴するのに適しているのである。人の魂は、世の中へ出て、そのつらさをなめ、その助け、その恵みを受けることにより、一段ずつ王者の位に向かって成長していくのである。上への道は深淵を通るしかない。光への道は、苦悩と死のやみを通っている。』⁶⁴

つまりリュティがここで指摘しているのは、「グリム童話」の「ゲルマン精神」のひとつにあの有名な「ドイツ発展（又は教養）小説」の本質をつけ加えているということである。このことについては更に別の論文で次のように論旨を展開している。「いずれにせよ昔話は繰り返して上昇を描いている——さし迫った危険の克服、解けそうもない課題の解決、王子や王女と結婚するまでの過程、王国とか金や宝石を手に入れる過程など。人間は自己を超えて成長しうる存在であり、最高のものへ至る芽をうちに孕み、その最高のものに到達することすらある存在である、というのが昔話に描かれている人間像である。（中略）昔話にあらわれる人間像には詳しく見るとまた別の面もある。昔話の主人公は本来旅人である。昔話は主人公をきまって広い世界へ送り出す。送り出す理由はいろいろで、両親が貧しくて子どもたちを手元に置けないこともあれば、委ねられた仕事や競争が主人公を遠い所へ無理矢理いかせたりすすんでいかせたりすることもあり、冒険に出かけようと単純に決意することもある。昔話はその主人公を、見る人おののく人としてではなく、旅する人行動する人として描く。』⁶⁵

このような主人公の典型は、いわずとしたドイツ文学最大の傑作、ドイツ文学の代表的人物像ゲーテの「ファウスト」の主人公にほかならない。

このことについては、ドイツロマン派の中にナチズムの源流をすどく看破しているピーター・ヴィーレックが次のような興味深い指摘をしている。「我々が考えたファウストは、ドイツ人に最も大きな影響をおよぼした完全な人生の理想であった。この完全な人生は、ことによっては、本人自身の不幸とその隣人の暴力的破壊を含んでいる。ファウストはこう祈願する。『おれは人類全体にあたえられたすべてのものを、内部の自己で味わいつくすのだ。おれはおれの精神で、もっとも高いものと、もっとも＜深いもの＞をつかむ。おれはおれの胸のなかに、あらゆる幸福とあらゆる＜悲嘆＞をつみかさねる。』

ロマン主義者は、この点にかぎらずあらゆる段階で一切の限定を拒否するので、唯一の満足として無限を欲するような立場に押しやられることになる。しかし、人間はだれも無限なものを達成することはできない。したがってロマン主義者は、不満をいだきながらも『永遠の努力』をすることに救いを見出したファウストのように、絶え間のない不満と絶え間のない努力に運命づけられているのである。

生と芸術の自己表現の全体性は、これまで抑圧されていた要素、すなわち正常なものと同様に病的なもの、道徳的なものと同様に非道徳的なもの、さらには魔術的なものさえ含んでいる。』⁶⁶

この見解は、まぎれもなきドイツロマン派の子であるグリム兄弟の代表的労作である「グリム童話」が、「ゲルマン的精神」の覚醒と鼓吹を意図したものとすれば、その「ゲルマン的精神」がいかなるものかを解き明かしているといえる。

ヴィーレックは、「ロマン主義は、現代のナチからいかにへだたっているように見えようと、あの古い『二つの魂』⁶⁷の現代の様相であり、ナチズムを可能にしたドイツの内面の深い分裂のあらわれなのである。』⁶⁸と、ドイツロマン派からナチズムへの血統を告発している。

こういう論点を相互に関連づけて展開すると、「グリム童話」とナチズムとの血縁関係が浮かびあがって来るのが見えるのではないか。

「グリム童話」を人類の宝庫⁴⁴と高く評価する見解は、おしなべて「グリム童話」の「自然性」(教訓的道德を超越している「自然」そのもの)を賞賛してやまぬ。たとえば、「グリム兄弟は、メルヒェンを集める時、あくまで民族童話を考えた。野の花のように、森の小鳥のように、そしてまた民族の鼓動のように、自然発生的な民話を考えた。(中略)こうして、兄弟は、民衆の中に根ざし、『その必然性をそれ自身の内に持つ』童話を、『すべての生活をうるおす永遠の泉からわき出るものを』集めようとした。(中略)童話も、花や小鳥にたとえられるように、自然に近く生きた人間の心から生れた。(中略)兄と弟は必ずしも一致しなかったにせよ、彼らは共に、童話のもとに、創作童話でなく、民族童話を考えた。ヤーコブが民族文学を『自然文学』、あるいは『教化されない人々の文学』と呼んで、『創作文学』、あるいは『教化された人々の文学』と区別している。『自然文学』は『全体の心から生れる』のに反し、創作文学は、『個人の心から生れる。』⁴⁵

そのほか「グリム童話」を高く評価する声として、『『グリム童話』は児童の世界の聖典である。『グリム童話』は『久遠の若さ』に生きる人間の心の糧である。』⁴⁶とか、『『グリム童話』は、そのまま児童の教育読本ではないかもしれないが、グリム自身の言葉をかりれば、『将来繁栄の可能性を有するものはすべて自然(生まれたまま)なるものであり』『われわれが教育読本のために求めるのは、背後になんら正しからぬものを匿しておらぬ率直な物語のもつ真のうちに在る清浄無垢である』。鳥が空に棲むごとく、魚が地球をめぐる水の中に呼吸するごとく、花が大地に根をおろしているごとく、人間の児童は、真理の国に生活する。しかるに、意識せずして真理の国に住むこの児童がおのずからにして大自然の教え子であることを思わず、人間一切の教訓は大自然そのものから来ることを忘れて、成人が、自己の意識的ならびに無意識的の越権から生ずる悪魔的ともいうべき好意によって刻々に児童の純真な心をそこないつつあるのは、まことに情ない現象と言わざるをえない。われわれ人間は、はかり知るべからざる混沌のうちに渾然たる大調和の存する大自然の前に、破壊の威力と建設の威力とを併せ有する大自然の前に、心をむなしくして跪坐しなければならぬ。大自然そのもののうちにこそ、道德の源泉はある。われわれは凡愚の存在、いわゆる悪人の存在をも善用活用しなければならぬ、禽獣魚介木石の生活をも蔑視してはならぬ、これらのものが各自それぞれの生活をいとなむありさまを仔細に観察するのは、無垢の魂の発展の方向を決定するに裨益すること少なからぬものと信じる。こういう意味において、『グリム童話』は大自然の縮図である。』⁴⁷といった主張がある。これらは、繰り返すまでもないが、じつはヴィルヘルム自身が、1815年刊「グリム童話」第2巻序文の中に次のように書きしるしていることに依拠している。「大自然(すべて生まれたまま、人為の加わらぬもの)は、それぞれの花や葉をそれぞれの色・形に發育せしめている。ここに、特殊の欲求にしたがって、それが自分に利益をもたらさないと言う人があったところで、その人は、それゆえに、その花や葉を別の色に染めかえてくれとか、切りすててくれとか、強要することはゆるされない。あるいはまた、雨や露は、地上に生いたつ一切のものを愛育する恩恵として落下する。何によらず繁栄をゆるされるのは自然のもの(すなわち、生まれたまま人工の加わらないもの)だけであって、この意を体して努力することが、われわれ人間の使命なのである。』⁴⁸なるほどこの見解の中には、現代文明とその中における人間の病める魂とのかかわりにたいして、

含蓄のある示唆を読みとることはできる。しかしこのように「グリム童話」の世界を「自然」と結びつける見解は、またしてもヴィーレックを援用すれば、「グリム童話」とロマン派とののっぴきならぬ血縁の告白なのである。

「一般に、生はもろもろの本能的な生命諸力、総体としての母なる自然という、広大で崇高な意味合をもっている」とされる。多くのドイツ・ロマン派が過去において、また現在もそうしているように自然の総体（世界）を神として崇拝する態度は汎神論として知られるものである。昔からドイツ人はスピノザの汎神論を好んできたが、ロマン派は神を世界に没入させて自然の総体が神であるとする。この自然崇拝は無神論に近づく。（中略）ところで、この自然崇拝・生崇拝の汎神論が、ナショナリズムに影響をおよぼすと、民族が歴史によってつくられるという考え方は捨てられ、民族は自然の一部であるということになる。民族は生物そのもの、すなわち人種となる。ヤーンにはじまるドイツ・ナショナリズムは、ワーグナーを経てヒトラーの人種崇拝となる。²⁴「グリム童話」—「ゲルマン精神」—「自然崇拝」—「ドイツロマン派」—「ナチズム」という奥探いとこで脈々とうっている「ゲルマンの血」の環流について、ここでは以上の指摘をするにとどめよう。

註

- (1) 西尾幹二「ヨーロッパ像の転換」新潮選書，9ページ
- (2) このことについては、例えば、宮下啓三「メルヘン案内」NHKブックス，23ページ以下「骨をぬかれた『白雪姫』の物語」などにも書かれている。
- (3) 国松孝二「グリム童話集」借成社文庫第5巻「解説」383ページ～
- (4) ヴィルヘルム・グリムはKHM再版第1巻の巻末の「手引き、メルヒェンの本質について」で「子どものメルヒェンは、その清い穏やかな光で心の最初の考えと力がめざめ成長するように語られる……」とのべている。高橋健二「グリム兄弟」新潮社，77ページ
- (5) マックス・リュエティ 野村汝訳「昔話の解釈」福音館書店，41～42ページ
- (6) 木村尚三郎「物語にみる中世ヨーロッパ世界」光村図書，31ページ
- (7) (4)78～79ページ
- (8) I. フェッチャー、丘沢静也訳「だれが、いばら姫を起こしたのか」筑摩書房
- (9) もっとあからさまにユダヤ人が悪玉として登場し、罰を与えられている話がある。たとえば、KHM7「うまい商売」である。この話しの主人公は愚直な百姓である。いわゆるハンスの典型であるが、彼をだますのがユダヤ人で、王様に密告し、逆におとがめを受けることになる。愚直な「ハンス」は、幸運にあずかることになっている。
- (10) (5)46ページ
- (11) (8)75ページ
- (12) 宮下啓三氏は「メルヘン案内」(NHKブックス)の中で、「白雪姫」は、わが国で1980年代はじめ現在、およそ25種類出版されていると記している。そしてその大部分のものが何らかの改変や省略をしているとし、その20種類の比較検討を詳細におこなった興味深い報告をしている。
- (13) 人肉を人間が食べるというあまりにもショッキングな話は、「白雪姫」のほか、KHM47「ネズ木の話し」やKHM22と23の間に挿入されている「子どもたちが屠殺ごっこをした話」などがある。
- (14) (5)56～57ページ
- (15) マックス・リュエティ、野村汝訳「昔話の本質」福音館書店，189ページ

- (16) ピーター・ヴィーレック, 西城信訳「ロマン派からヒトラーへ——ナチズムの源流」紀伊国屋書店, 38~39ページ
- (17) デーテの「ファウスト」の中のことば「おれの胸には、ああ、二つの魂が住んでいてそれが互いに離れたがっている。」(「ファウスト」第1部, 1113~13行)
- (18) (1)21ページ
- (19) (4)「まえがき」
- (20) (4)94~95ページ
- (21) 金田鬼一訳「グリム童話集」岩波文庫, 「序」
- (22) (2)「はしがき」
- (23) (2)第5巻「跋文」
- (24) (1)27ページ

参 考 文 献

- Grimm, Brüder: Kinder-und Haus-Märchen. München, Winkle 1949
- Johannes Bolte, Georg Polivka: Anmerkungen zu den Kinder-u. Haus-märchen der Brüder Grimm. Leipzig, Dierrichische Verlagsbuchhandlung. 1913. I~III
- Friedrich Panzer: Die Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Stomverlag, Hamburg=Bergedorf. 1948. I~III
- Iring Fetscher: Wer hat Dornröschen wachgeküßt? Das Märchen-Verwirrbuch. Fischer Taschenbuch Verlag.
- HansTraxler: Die Wahrheit über Hänsel und Gretel, Rowohlt Taschenbuch Verlag, 1982
- 備成文庫版「完訳グリム童話集」1-5
- 金田鬼一訳「完訳グリム童話集」岩波文庫
- 高橋健二「グリム兄弟」新潮選書
- 宮下啓三「メルヘン案内」NHKブックス
- P. ヴィーレック, 西城信訳「ロマン派からヒトラーへ」紀伊国屋書店, 1975
- マックス・リュティ, 小澤俊夫訳「ヨーロッパの昔話」岩崎美術社, 東京, 1985